

洗練された通りが走る。食いつなぐのだけで精一杯な公団住民と、まるでファッション雑誌から抜け出したみたいな超高層マンション住民とが当たり前前に擦れ違ふ。

光が強い分、影もまた濃い。

蒼はガウン姿で広いベッドに横たわったまま、大きな窓に臨む浦東地区の高層ビル群の夜景をぼんやり眺めながら、そんなことを考えていた。

逃走劇でよほど疲れ果てていたらしい。早朝に途切れた意識が戻ったとき、すでに陽は完全に落ちていた。血に汚れた衣服の代わりにナイトガウンを着せられ、右肩の傷は処置が施されていた。包帯は大仰に胸の上部まで巻かれている。

あの男が、このマンションの上層階らしい部屋——リビングダイニングのほかに広い部屋が何室もあることは、洋風ななかに骨董家具をアクセントとして取り入れた、非常に洗練された空間だ——に自分を連れてきたのだろう。

放り出さずに怪我の手当てをしてくれた、というのは感謝すべきことだったが、玄関のドアが開かず外に出られないことを考えると、そうありがたがってばかりもいられない。

「……耿零飛^{ガシンフエイ}、か」

車で気を失ったときに考えていたバックミラーに映った男の正体は、ここで目を覚ましたのと同時にぽつかりと浮かんできた。

そして、それはいつそ思い出さないほうがマシな答えだった。

「マフィアから逃げてたはずなのに、乗り込んだのがまたマフィアの手だったなんて、笑えないって」

前髪をぐしゃつと掻きながら、身体を起こす。

ぐらつく視界を何度かの瞬きで落ち着ける。

耿零飛は、今朝がた蒼を追っていた組織とは違うが、上海の黒社会を仕切る二大組織のうちのひとつである千翼^{イチエンバン}幫の幹部だ。より正しく言えば、千翼幫総帥の次男にあたる。

生粋の黒社会出身の人間でありながら、飛^{フエイティエン}天 對外貿易有限公司のトップという表の顔も持っていて、蒼が彼の顔に覚えがあったのは、よく経済誌などに写真入りで取り上げられていたからだった。

マフィアが闇の金を流用して表社会に進出し、高度成長の立て役者となる……それは上海や香港では日常的に見られる構図だ。権力のあるところに、マフィアは必ず巣食う。警察上層部にすらマフィア関係者がはいり込み、黒社会に便宜を図っているのは周知の事実だ。

——そうやって黒社会は増長して、海外にまで手を広げてる。俺たちみたいな貧しい層の人間たちを取り込みながら、犠牲にしながら、巨大化していく。

実際、蒼の幼馴染みの幾人かは、黒社会へと身を墮^おとしていった。

そして妹もまたマフィアの手にかかって……思わずギリッと唇を噛み締めると、口のなかに血の味が広がる。

と、玄関ドアが開く音がした。蒼は反射的に身体を緊張させて、身構える。

リビングのフローリングをゆったりと横切る足音が聞こえ、寢室のドアが開いた。

ドアのところで立ち止まった男は、長身のしっかりした身体でチャコールグレイのスリーピースをこのうえなく完璧に着こなし、この国が誇る超一級のビジネスエリートらしい鮮やかな空気を放っている。

耿零飛は、部屋に一步足を踏み入れてくるなり嫌味を口にした。

「今朝は楽しい時間をありがとうございました。お陰で、いい目覚ましになりましたよ」

確かアメリカの大学を一年スキップして卒業し、それからすぐに飛天對外貿易有限公司トップに就任して今年で三年目だから、まだ弱冠二十四歳のはずだ。

けれども肩にかかる漆黒の髪を後ろに流し、鋭い眼差しをもつ彼は、大きな成功を収めている青年実業家の自信と落ち着きに満ちている。

車を奪った自分のおこないには確かに非があつたけれども、マフィアに対して頭を下げる気にはなれない。無言で睨にらんでいると、相手は口元に薄く笑みを浮かべた。

「ここで反抗的な態度を取るのは、あまり賢いこととはいえませんよ」

零飛はベッドの横に佇たぐずみ、腕を胸の前で大きく組んだ。ただそうして立っているだけなのに、表現しがたい威圧感が彼から漂う。

蔑むように見下ろしてくる男の眸ひとみは、闇の色だ。

視線と高圧的な雰囲気押し潰されそうになる。抗いたくて、蒼はベッドから下りて立ち上がろうとした。

「誰が立っていいと言いました？」

その言葉とともに、右肩に激痛が走る。蒼は大きく呻いて、腰をマットレスへとふたたび沈めた。

「縫うほどの大怪我だったんです。無茶はいけません」

「……手」

「はい？」

「手を、どけろっ！」

ナイフで刺された傷口を強い親指でぐりぐりと捏ねられる激痛に耐えかねて、蒼は叫んだ。
「どけろ、ですか。この私に命令するとは、本当に自分の立場のわからない人ですね」
零飛の声には明らかに楽しんでいる色がある。

いまここにいるのは、品のいい青年実業家などではなく、千翼幫の幹部だった。

「いくつか質問をしますから、答えなさい。まず、名前からうかがいましょうか」

「……黒社会の奴に教える名前はない」

激痛を堪えて、蒼は零飛の手首を掴むと自分の肩から引き剥がした。そのまま身を捻じるようにして立ち上がり、二歩ほどの間合いを取る。

親指だけ折った左掌を相手に向ける。右手は打撃を繰り出せるように拳こぶしを作つて脇に引き、下げた右足に重心を置く。その型を取ると、零飛の肩がかすかに動いた。

彼は目をすつと細め、緩い弧を描くかたちで蒼の周りを歩く。その動きに呼応して、蒼の足は縦横に歩を踏んだ。身体に染み込んだ動作なのだが、貧血がみらいしい。半ば雲のうえに立っているかのように足元がおぼつかない。視界が揺れている。

「武術の心得があるようですね。その歩の取り方は秘宗拳ひしゅうけんですか？」

じつと蒼の動きを観察していた零飛が問う。

その洞察は正しかった。蒼は秘宗拳の一門に属し、師の下、道場で子供たちに拳法を教えることを生業なまわいとしている。

わずかな動作を見ただけでそれを見抜いたということは、零飛自身、なんらかの拳法に通じているのだろう。実際、彼の身体はどこにも力はいっていないようにういて隙というものがまったくない。

——本当にまずい相手に捕まったのかもしれない……。

ざわざわと、嫌な予感が背を撫でる。

万全の体調のときならいざ知らず、いまこの男と拳まじを交えて勝てる気がしなかった。その同じ勝負の読みを零飛もしたのだろう。彼は拳法を使う気もない様子でさつと蒼へと歩を進めてきた。